

学校支援をととした地域住民の意識変容

—東京都板橋区立蓮根第二小学校「ビオトープをつくろう会」の事例研究—

田中 雅文
(日本女子大学)

【要旨】

本稿は、東京都板橋区立蓮根第二小学校「ビオトープをつくろう会」の事例分析をとおして、学校支援に取り組む住民（保護者）が地域・社会への視野を広げるプロセスを分析し、生涯学習における学校の新たな機能を探ることをめざしたものである。分析の結果、住民（保護者）がビオトープ活動をととした偶発的学習と学習会などの意図的学習との相乗効果を経て自然（生態系）への理解を深め、地域や社会全体に向けた環境活動の意欲を抱くまでになるプロセスを仮説的に描くことができた。これによって、成人の学習装置としての学校の可能性がみえてきた。

1. はじめに

学校支援が地域（社会）づくりやそうした視点をもつ住民の成長につながるという観察が増えている¹⁾。ただ、そのようなメカニズムを調査データによって分析するという試みは決して多くない。このような背景をふまえ、本稿は事例分析をとおして、学校支援の活動に参加する住民が地域・社会的な活動への基礎的な視野を広げるプロセスを分析し、生涯学習における学校の新たな機能を探ることを目的とするものである。

事例としては、東京都板橋区立蓮根第二小学校（以下蓮二小）の「ビオトープをつくろう会」（以下「つくろう会」）を取り上げる。これは同校の在籍児童の保護者を中心に構成され、「（保護者を中心とする地域住民が）ビオトープを通じ、子供達・先生方・主事さんと共に活動する会」である。ここで、ビオトープとは野生生物の生息を可能とする空間を意味しており、学校ビオトープとはそのような生態系ゆたかな空間を学校教育施設として整備するものである²⁾。同校は、第2回学校ビオトープ・コンクール（2001年度）で（財）日本生態系協会会長賞を受賞したほか、ビオトープを活用した総合学習の成果を認められて2002年度東京都教育委員会職員賞（学校賞）を授与された。なお、蓮二小「つくろう会」のメンバーの大半は保護者である。保護者は学校に最も関係の深い住民であり、しかも職業や子育ての現役であることから地域との関わりを持ち難い年代である。したがって、本稿が住民のなかでもとくに保護者に焦点をあてることには一定の意味があると考えられる。

ところで、地域住民による学校支援は、その活動内容から①学校運営、②教育活動、③学習環境整備、④安全管理に分類できる³⁾。学校ビオトープの造成・管理を中心とする「つくろう会」の活動は、以上のうち③に属するものである。一方、参加する地域住民の活動経験という点からみると、後の記述でわかるように、「つくろう会」はビオトープについても学校支援についても未経験の状態から発足している。その点では、地域におけるビオトープの経験を生かして学校ビオトープに協力するNPO法人アサザ基金（茨城県）やNPO

法人グラウンドワーク三島（静岡県）、学校支援の総合的な経験をもとに教師・児童と協力して学校ビオトープをつくった秋津コミュニティ（千葉県）などと、決定的に異なる。

以上のように、「つくろう会」の活動を全国的な学校支援の動向のなかで位置づけると、活動内容からは学習環境整備の活動、住民の経験という点ではビオトープや学校支援について未経験の状態から始まった活動という特徴をもっている。未経験からの出発であるからこそ、学校支援をとおした住民の意識変容が明確な形でとらえられるものと考えられる。

本稿の執筆のために、筆者は「つくろう会」の会合に出席して参与観察を行う（2002年10月～2003年4月の間に3回）とともに、メンバーへのアンケート調査（概要は3節参照）を実施したほか、必要に応じて関係者への聞き取りを行った。なお、文中括弧書きで示す記号とページは、巻末の資料の記号とページに相当する。

2. 「ビオトープをつくろう会」の取り組み

(1) 蓮根第二小学校の概況

蓮二小は東京都板橋区の北東部、荒川土手まで歩いて20分の位置にある。1978年に巨大な集合住宅群のなかに創立された同校は、当初は大規模校であったものの、高齢化と少子化に伴って2002年度には児童数が約350人（12学級）にまで減少した。こうした背景のなかで生まれた蓮二小の学校ビオトープは、荒川の自然をモデルにしたものであり、造成や管理にあたっては保護者を中心とする地域住民による協力を大切にしている。

(2) 「ビオトープをつくろう会」の活動

1) 「つくろう会」の創設

母親たちの働きかけもあり、蓮二小が創立20周年を過ぎたころから、父親の参加できるレクリエーション活動が活発に催されるようになった。そのメンバーであった父親たちのなかから、子どもや教職員を巻き込んで各種のお楽しみイベントを推進しようというねらいで、「あそぼう会」と名乗るグループが生まれた。

「つくろう会」の発足は、当時の学校長（T校長）が2000年初頭、「あそぼう会」がまだこれといった学校支援の活動を開始していないとき、そのメンバーにビオトープづくりを持ちかけたことに起因する。といっても、メンバーの誰一人としてビオトープに関する知識があったわけではない。T校長から話をもちかけられても「ビオトープってなに？ 美味しいの？」（A：p.26）といった程度の認識だったという。そんな素人メンバーに対し、T校長の強い熱意が次第に伝わり、何回かの学習会を経て同年5月には「つくろう会」の結成をみた。それ以来、「つくろう会」は定例作業を月2回（第1・3土曜日）行い、「つくろう会」だよりを隔週発行している。結成当時の様子をメンバーは次のように振り返る。

（T校長は）この「あそぼう会」に接近してきたのです。（中略）それも並みの近づきかたではなく、ズンズンズンズン気がついたときには自分も「あそぼう会」のメンバーであるかのような顔をして圧倒的な存在感をアピールしておりました。（中略）この行動力こそが今回のビオトープ創りの原動力の90%以上を占めているといっても過言ではないでしょう。（C：p.4）

こうして、T校長の強いリーダーシップに支えられ、2000年7月には「つくろう会」の手によって試作品としてのミニビオトープが造成された。ここで強調すべきは、次の3点である。第1に、「つくろう会」メンバーは当初、「ほとんどがサンダル履きのままスコップ、つるはしを振り回す」(C:p.4)といったほど作業に不慣れであったけれども、とにかく一致団結と創意工夫のもとに造成に成功した。第2に、『「ええ！ホントにいいんですかあ？」(「つくろう会」)と思うシーンでも『いいんです、好きにやってください。私が責任を持ちましょう』(T校長)」(C:p.5)という回想録にあるように、T校長はできるだけメンバーの自由な活動を尊重し、楽しく生き生きと作業ができるよう気を配った。第3に、当初は大人だけではじめた作業に対し、次第に子どもたちも関心を示して参加するようになった。大人たちの作業姿に関心をもった子どもたちは、「(はじめは)チラッと見るだけで通り過ぎていくだけ。それでも体中を好奇心の固まりにして現場周辺をうろうろし始めるまで、それほど長い時間は」(C:p.6)かからなかったという。

2) 「いきものひろば」の造成と活用

さて、「つくろう会」の結成と前後して、教師陣も急ピッチでビオトープに関する学習に取り組みはじめた。度重なる研修会と先進事例の見学会。「学校が(ビオトープを)創るにあたって乗り越えなければならなかったことは、指導者である先生方が生態系について理解を深めることでした」(A:p.39)と振り返るT校長の期待に沿って、ビオトープに関する基礎知識と感覚をそれぞれの教師が身につけていったのである。

こうして、ミニビオトープでノウハウを身につけた保護者と研修や研究で指導者としての力量を磨いた教師たちに支えられ、コンクールの受賞対象となった本格的なビオトープ「いきものひろば」が2000年秋～冬に造成された。ここで注目すべきは、次の2点である。第1に、子どもたちの主体性が最大限に発揮された。子どもによって構成されるビオトープ実行委員会が中心となって設計案をつくり、10月から12月にわたる数多くの作業を各学年が分担して行ったのである。「いきものひろば」の命名も子どもたちによるものである。第2に、子どもたちの主体性を生かしながら教師と業者が要所を締めたとはいえ、「つくろう会」のメンバーもまた作業の大きな力となった。こうして、子ども主体のもとに、教師と「つくろう会」のエネルギーが結集して「いきものひろば」が完成したのである。

「いきものひろば」は、各学年・各教科で活用されている。国語、算数、社会、理科、図工、音楽、体育、家庭の各教科に生活・総合と道徳を含めると、小学校では10種類の授業科目がある。ビオトープ完成後から2002年10月までの間に、蓮二小ではこれらの授業科目のうち、1年生は7科目、2年生は6科目、3年生は8科目、4年生は7科目、5年生は8科目、6年生は6科目でビオトープを生かした授業を行っている(E:p.12)。これほどまでにビオトープを活用する学校は珍しい。しかも、日常におけるビオトープの管理・育成をとおして、「つくろう会」がこれらの授業の質の向上に大きく貢献しているのである。

学校ビオトープ・コンクールの現地審査にもメンバーが出席し、審査員への質問に答えた。コンクール後に審査員の一人であるドイツのレイナート教授が学校を訪問したときにも同席し、「保護者とのつながりはこんなに強いのですか。この学校はビックリするほど父母と学校が親しいんですね。」という教授の驚きを引き出した(A:p.205)。「つくろう会」のメンバーは、「うちの学校では・・・」という口調でビオトープを使った授業の内容を外部

者に説明することがしばしばある。ビオトープをとおして学校のカリキュラムに密着し、教師・子どもと強い一体感で結ばれる「つくろう会」の姿をみることができるのである。

3) 活動概況と外部機関の支援

「つくろう会」は、これまでにビオトープの知識習得のために学習会、見学会、観察会を、それぞれ5回以上積み重ねてきた⁴⁾。学校ビオトープのために行ってきた作業は、合計約80回にのぼる。学習会等を意図的学習、作業をとおした発見や理解を偶発的学習⁵⁾と呼んでみれば、まさに意図的学習と偶発的学習の相乗効果によって、メンバーは自然生態系や環境問題、子どもの生育環境の問題について、さまざまなことを学んできたといえるだろう(その様子は、後述アンケート調査の結果に表れている)。そして、その成果をすでに数回にわたり、学会や大学を含む各方面の研修会等で発表しているのである。

最後に、「つくろう会」の学習や活動を側面から後押ししている行政や専門機関の役割も重要である。制度面・資金面で多様な支援をしてきた板橋区教育委員会、2000年から2002年までの間に7回ものビオトープ学習会を提供してきた同区環境保全課、環境教育のノウハウ面で援助してきた同区エコポリスセンター、専門知識の面で支えてきた(財)日本生態系協会やシェアリングアース協会といったNGOなどの存在は大きい。東京都教育庁によって2002・2003年度消費者教育・環境教育課題研究校に指定されたことは大きな刺激となり、冒頭に述べたような各種受賞も大きな励みになっているに違いない。

3. アンケート調査の結果

次に、「つくろう会」のメンバーを対象に行ったアンケート調査の結果を記述する。調査は2002年10月、常時活動に参加している18人に依頼した。学校をとおして調査票の配布・回収を行い、回収率は83%(配布数18票、有効票回収数15票)であった。回答者の属性をみると、性別では男性8人、女性7人とほぼ同数、年齢では30歳代4人、40歳代8人、50歳代3人である。職業は勤め人7人、自営・自由業1人、主婦(家事専業)3人、主婦(パート等・内職・家族従業員など)4人という構成になっている。

(1) 参加のきっかけと変化

「つくろう会」の活動に参加したきっかけとして、最も重要なものを一つだけ選んでもらった。次に示すように、多様なきっかけで参加していることがわかる(数字は回答者数)。

学校や教育に役立つことをしたかった=3/「その他」=3/先生・知人・家族等にすすめられた=2/すでに活動している人にさそわれた=2/他の父母等との付合いを広げたかった=2/なんとなくおもしろそうだった=2/植物や虫に関する活動をしたかった=1/もともとビオトープに興味があった=0

このように、学校や教育への貢献をあげた回答者は3人にすぎない。一方、植物・虫やビオトープといった自然系の関心をあげた回答者も少なく、「素人集団」からはじまったビオトープづくりという、前述の経緯を裏付ける結果である。

次に、ビオトープ活動に参加したことによる自分自身の変化をみてみよう(左の数字は

「非常にあてはまる」の回答者数、括弧内の数字は「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」の回答者数の合計。

学校や教育への関心がたかまった＝8 (14) / 環境問題への関心がたかまった＝5 (12) / 地域のことに興味をもつようになった＝5 (10) / いろいろな子どもたちと知り合えた＝4 (11) / 自分達でここまでやれるという自信がついた＝4 (11) / 学校の行事に積極的に参加するようになった＝4 (6) / 子どもや家族との会話がふえた＝3 (12) / 生活に充実感ができた＝3 (11) / 地域のなかでの人間関係が広がった＝3 (9) / 地域の行事に積極的に参加するようになった＝2 (7)

この結果をみると、第1に学校や教育、第2に環境や地域への関心が高まる様子がみとれる。学校ビオトープの活動への参加が、学校支援や地域・社会問題への関心を高めているようである。

(2) 活動の感想

ビオトープ活動の感想を自由回答で記述してもらった結果が、第1～3表である。各表とも、記述内容を筆者が分類して整理している。

参加して一番よかったこと（第1表）を訪ねた結果をみると、「自分自身の充実感・学習」という回答が多い。ここには、自分の存在確認、自然との触れ合い、人間関係など多様な内容が含まれる。とにかく自分自身のために役立ったというのが率直な感想とみてよい。そうした自分自身への効果の中身を第2表からみてみると、自然との共存、生き物や環境問題への関心など、「自然（生態系）についての理解」に回答が集中している。ビオトープ活動が環境問題に関する体験的な学習になっていることの証であろう。

第1表 参加して一番よかったこと

※自由回答への回答者数は14人。（*）を付けた回答は1人が二つ以上の内容を回答したケース。

自分自身の充実感・学習 (10 回答)	自分の存在を確認できた／童心にかえて充実感がある／土や生き物に触れて癒され、気持ちのリフレッシュができる（*）／子どもの頃のように楽しめている／先生・父母との付き合いができた（*）／普段体験できないことが体験できた（*）／今まで以上に自然に関心をもてるようになった（*）／生活に自然環境が重要であることを認識できた／保護者の先輩から子育てのアドバイスをもらえた（*）／学校の可能性の大きさと存在意義がわかった
子どもたちにとっての効果 (4 回答)	子どもが嬉しそうにしている（*）／子どもたちが生き物と触れ合って楽しそう／生態系が豊かになり、それを子どもたちが大切にしている／学校が子どもたちを大切にしてくれていることがわかった
自分と子どもたちとの交流 (3 回答)	自分も子どもも生き物に共通の関心をもてるようになった／子どもたちとの会話が広がった（*）／子どもたちとの会話が充実するようになった
その他 (1 回答)	不可能と思っていたことが「生き物広場」として発展したことがすばらしい

最後に第3表は、「ビオトープをつくろう会」の好ましい発展方向を尋ねた結果である。地域・社会への波及効果に関する回答が多くなっており、学校内での活動にとどまらず、地域や社会全体に広げようとする気持ちが表れている。第3表の★印をつけた回答はそうした気持ちを代表するものであり、記述内容を詳しく再掲すると次のとおりである。

ビオトープというスポットができてから、(中略)「地域」という単位でものを考えるようになりました。これが実を結んで地域との活動がうまくいったとすれば、おそらくその先には東京、日本、世界、宇宙へと思考が進んでいくのではないかと思うのです。

第2表 自分自身が成長したこと、あるいは新たに学んだこと

※自由回答への回答者数は14人。(*)を付けた回答は1人が二つ以上の内容を回答したケース。

自然(生態系)についての理解(9回答)
自然と共存する環境づくりと、そのための意識づくりが重要とわかった/草・木・虫への関心が深まった/自然に対する愛着がわいてきた/以前よりも鳥・葉・花に目がとまるようになった(*)/草花や動物に対する興味がより深くなった(*)/環境問題への関心が高まった/「生態系のふしぎとすばらしさ」がわかった/自然の再生力に驚くとともに、区内に自然が残っていることに気づいた/遠くにいなくても毎日自然と触れ合えることのできる大切さを感じた
自分の位置や力(5回答)
多くの方に助けられて自分があるとわかった/自分が少しでもこの活動に役立てるようになると思う/自分たちの小さな力でも生き物を誘致できることがわかった(*)/地域・その他の人間関係が広がった/ボランティア活動のすばらしさがわかった
地域づくりへの明確な意識(1回答)
学校だけでは満足できず、「地域」を単位に物事を考えるようになった(さらに、思考は日本や世界・宇宙に広がる)(*)

第3表 「ビオトープをつくろう会」の好ましい発展方向

地域・社会への波及効果に関する回答(10回答)
<ul style="list-style-type: none"> ・ ビオトープを各学校、各公園に広げる活動に・・・ ・ より緑を多くして、地域の人も憩いの場となるように ・ 自然環境の輪を広げ、生活環境を良くする方向にすすむ ・ 環境活動を通じ、地域と密着したボランティア活動などを児童とともに行っていく ・ 在校生・卒業生・地域住民を巻き込んで、自然のなかで集える場をつくる ・ 地域住民がもっと参加し、町会等にもこのような活動が広がるといい ・ 多くの人の参加によって地域にも自然を取り戻す運動が広がるといい ・ 「自然再生」の発信源として地域にも情報発信をしていく ・ 子どもたち・地域住民と一緒に、地元のビオトープとして何十年も続けていきたい ・ 学校だけでは満足できず、「地域」を単位に物事を考えるようになった(さらに、思考は日本や世界・宇宙に広がる) <第2表の最後の回答と同じ内容>★
その他(4回答)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地道に活動していくことが望ましい ・ 子どもたちが、教師と父母の手作りの暖かい学校に通えるようにしたい ・ あくまでも自然界に近いかたちで生物が生息できる空間にする ・ もっと多くの保護者(とくに父親)と子どもで気軽に参加できるといい

以上のように、ビオトープ活動は自然（生態系）への理解を中心に参加者自身の学習や成長に大きく寄与しており、しかもそうした学習成果を地域や社会全体の向上に役立てようとする意識も芽生えているのである。

4. 結論

(1) 分析結果のまとめ

2節と3節でみてきたことから、次のような仮説を提示できる。多様なきっかけから学校ビオトープの活動にはいつてきたいわば「素人」の保護者たちが、活動をとおした偶発的学習と学習会などの意図的学習との相乗効果を経て次第に自然（生態系）への理解を深め、今では地域や社会全体に向けた環境活動の意欲を抱くまでになった。このプロセスには、次の諸要因が影響しているものと思われる。第1に、T校長の強いリーダーシップと「つくろう会」の自由度を高めるためのきめ細かい気配りである。第2に、各学年・各教科でビオトープを使った授業を展開するという教師陣の取り組みである（これによって、自分たちの活動の意義を確認することができたに違いない）。第3に、ミニビオトープづくりでお手本を示したことが、本格的なビオトープづくりにおける子どもたちの主体的な活動のもとになっている、という自信である。第4に、ビオトープをとおして学校のカリキュラムに密着し、その推進役を担っているという（教師・子どもとの）一体感である。第5に、行政や専門機関によるさまざまな支援である。第6に、各種受賞や学校外での発表をとおして培われた幅広い視野である。

以上が今回の分析から得た仮説である。もっとも、今回の分析はアンケート調査をもとに意識変容の可能性をとらえた段階にとどまっており、これによって学校支援をとおした意識変容のメカニズムを明らかにしたとはいいい難い。今後は、「つくろう会」の各メンバーへのインタビューを含めて的確なデータ収集を重ね、上記の仮説の妥当性を検証する必要がある。さらに、教職員への調査をとおした学校側の条件に関する分析、他の事例（とくに学校ビオトープ以外の活動分野）に関する継続的な調査・分析などにより、学校支援をとおした地域住民の意識変容について普遍的な知見を見出すことも長期的な課題である。

(2) おわりに——学校の新たな機能を求めて——

蓮二小の学校ビオトープ活動は、子どもたちからみると学校教育、「つくろう会」からみると環境問題を体験的に学ぶための社会教育であり、その意味で学社融合の典型である。そして、上記第1～6の諸要因をみると、学校教育と融合した活動だからこそ「つくろう会」メンバーの学習が効果的に促されたと考えられる。この仮説が当たっているとすれば、子どもたちの教育以外に、学校は成人の学習装置としての意味をもっていることになる。

しかも、単なる学習装置ではない。第3表が示すように、新しい地域・社会のあり方についての視野を培う学習の場として機能している。いつてみれば、主体的な市民として明日の社会を創っていくための学習—社会創造型の学習⁶⁾—を学校が推進している。かつてローマクラブは、既成社会の構造を変革して環境問題などの解決をめざす学習を革新型学習と呼び、そのような学習を世界的に広げることを提案した⁷⁾。今こそ学校は、こうした革新型学習、社会創造型学習を推進するための拠点ともなりうるのである。

付言すれば、このような学習装置として学校が機能するための条件として、従来から重

要とされてきたことがある。それは、地域住民を人材として「活用」という「学校主体」の考え方ではなく、「主体的な住民」が学校を舞台に「活動」する、あるいは「楽しみを子どもたちと共有する」という考え方である⁸⁾。主体的に子どもたちと共に楽しんでいる「つくろう会」の活動は、まさに後者の考え方に沿ったものである。人材活用を超越し、住民が学社融合で自由かつ主体的に学ぶという域に達したとき、さらに広がり求めて社会創造型や革新型の学習に発展するのではないだろうか。

【注記・引用文献】

- 1) 千葉県習志野市の秋津コミュニティ（岸裕司『学校を基地にお父さんのまちづくり』太郎次郎社、1999）、栃木県鹿沼市（鹿沼市教育委員会生涯学習課『子どもを育てる方向の共有化と活動の協働化—文部省並びに栃木県教育委員会委嘱学社連携・融合研究報告書—』1997、栃木県鹿沼市教育委員会編『学校をつくる 地域をつくる——鹿沼発 学社融合のススメ』草土文化、2000）の取り組みなどに表れている。
- 2) 学校ビオトープの詳細や意義については、(財)日本生態系協会の編集による2冊（『学校ビオトープ—考え方・つくり方・使い方』講談社、2000、『環境教育がわかる事典—世界のうごき・日本のうごき』柏書房、2001）、および田中雅文「市民性教育からみた学社連携—学校ビオトープの導入をめぐる—」明石要一編著『新・地域社会学校論—完全学校週5日制の中で—』ぎょうせい、1998などを参照。
- 3) 伊藤俊夫「学校支援ボランティア」伊藤俊夫編『生涯学習・社会教育実践用語解説』（財）全日本社会教育連合会、2002、p.37。
- 4) 学習会は板橋区環境保全課の主催による講演会形式の「ビオトープ学習会」、見学会は学校ビオトープの先進事例の見学、観察会は荒川土手の自然観察会を指している。
- 5) 偶発的学習とは「学習や教育の意図がないながらも、偶然、学習者に学習がもたらされる営為」（伊藤俊夫「偶発（的）学習」伊藤俊夫、前掲書、p.50）をいう。
- 6) 田中雅文「「民」が広げる学習世界」白石克己・田中雅文・廣瀬隆人編『「民」が広げる学習世界』ぎょうせい、2001、pp.4-5。
- 7) J.W.ボトキン他／大来佐武郎監訳・市川昭午他訳『限界なき学習—ローマクラブ第6レポート—』ダイヤモンド社、1980。
- 8) 岸裕司、前掲書、p.74／黒崎通「『学社融合』の進め方」栃木県鹿沼市教育委員会編、前掲書、p.175／廣瀬隆人「「協働」の支援者としての教育委員会」白石克己・佐藤晴雄・田中雅文編『学校と地域でつくる学びの未来』ぎょうせい、2001、p.202など。

【「ビオトープをつくろう会」に関する資料】

- A.寺田茂編著『学校ほど愉快なところはない～夢を実現させた学校物語～』驢馬出版、2003
- B.寺田茂監修（ビデオ）『学校ほど愉快なところはない～夢を実現させた学校物語～』オフィス ボウ、2003
- C.ビオトープをつくろう会『泣き笑い顛末記～575日間の記録』2001
- D.東京都板橋区立蓮根第二小学校『つくったよ、みんなのビオトープ！』2001
- E.東京都板橋区立蓮根第二小学校『守る 育てる 活かす 広げる みんなの学校ビオトープ！』（2002年10月11日学校公開・授業公開資料）2002
- F.東京都板橋区立蓮根第二小学校のホームページ <http://www.ecopolis.city.itabashi.tokyo.jp/edu/hasu2es/>